

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格⑥

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章3節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて見ていきたいみことばは第一テモテ3章です。聖書をお持ちの方はどうぞお聞きください。多くの方がご存じの通り、私たちは今、霊的リーダーのあるべき姿、特に「監督とその資格」について時間をかけて学んでいます。今一度思い返していただければ、この手紙は、自分の弟子であったテモテに宛て、パウロが書き送ったものでした。そのテモテは、非常に重要な任務を手紙の中で命じられていたのです。その任務とは、パウロに代わってエペソの町に留まり、教会が直面しているさまざまな問題を解決するというものでした。テモテは、エペソの兄弟姉妹が健全な教会生活を送ることができるようにと、みことばをもって教え導く責任を負っていたのです。しかし、これは簡単な仕事ではありませんでした。この時、教会内には、素直にみことばに耳を傾けようとはしない、非常に高慢で、絶えず争いを引き起こすような偽りの教師たちが入り込んでいました。そして、そんな彼らが聖書とは異なる教えをすることによって、教会の中に混乱が生じていたのです。正しい道から逸れた偽りのリーダーたちによって人々は苦しんでいました。だからこそ、その現状を把握していたパウロはテモテに、あなたは町に残って違った教えを説いている偽教師たちを黙らせなさい、また人々がそんな間違った教えに心を奪われないように命じなさい、と求めたのです。

このように大切な働きがテモテを待っていました。でもパウロは、ただなすべき任務だけを彼に与えたわけではありません。テモテを心から愛していたパウロは同時に、教会の中で起こっている問題をどう取り扱うべきなのか、具体的な指令をこの手紙の中で記していたのです。

その一つが、今私たちがこの3章から学んでいる「監督の資格」になります。パウロは混乱を引き起こしていた偽りのリーダーたちに対して、聖書の求める霊的リーダーがどのような存在なのか、どのような人物を教会の監督として選ぶべきなのか、その基準をここで明確に記していたのです。パウロは、教会を監督するリーダーはこのような基準を満たしたものでなくてはならないと言って、15個の資格を挙げていました。その一つ一つをこれまで皆さんと一緒に順を追って考えてきました。そのことからわかったのは、群を守り導いていく者には、大変大きな責任が課せられているということでした。でもこれももう何度も繰り返し言っていることですが、これらの資格というものは何もリーダーだけのものではなく、信仰の成熟を目指す私たちひとりひとりが目標とするべきものでもありました。だからこそ、私たちがこの資格を見ていくときに考えるべきことは、ほかの人がどうかではなく、まず自分自身がみことばの基準に沿った歩みをしているのかどうかを考える必要があったのです。

そして皆さん、きょう私たちはこれからまた、新たに二つの資格を見ていきます。それらの資格は、今の私たちにとって、それぞれがよく吟味しなければならないものになります。もっと言えば、前回取り上げた「暴力を振るわず」と、きょう見る「温和で」、「争わない」を合わせたこの三つの資格は、まとめて一つのものとして自分の歩みと照らし合わせて考える必要があります。これは何も、これら三つのものが特別で、ほかの資格が大したことのないものだと言いたいものではありません。すべてが私たちにとって大事なものです。ただし、これら三つの資格は、私たちが日頃よく経験し、失敗することの多い、ある問題に関係しているものだということです。どんな問題かわかりますか？それは、人間関係に関する問題です。

ここで少し自分の歩みを振り返ってみてください。皆さんはこれまでに、争いや、もめごとといったものによって、人との関係がこじれたり、壊れてしまったといった経験をされたことがあると思います

が、では、最後にそのようなものを経験したのはいつでしょうか？今年が始まってからそのようなことを経験したことがあったでしょうか？三か月以内にそのようなことを経験したことはあるでしょうか？一か月以内ならどうでしょうか？今週ならどうでしょうか？もしかしたら、きょう教会に来る前にそのようなものを経験した人がいるかもしれません。また皆さんの中に、今もなお、そのような壊れた関係をだれかに対して持ち続けているようなことはないでしょうか？もちろん、このような問題をいつどれぐらいの期間経験したかは、人それぞれ違うと思います。でも悲しいことに、罪人である私たちが罪にあふれたこの世界を生きる限りは、こうした人と人との間に起こる問題というものに必ず直面するのです。私たちはだれもそれを望みはしません。にもかかわらず、意図せずとも相手を傷つけたり、相手に傷つけられたりすることがあるのです。そうですね。そして、これはクリスチャンとて同じことです。恵みによって救われ、罪赦された信仰者であったとしても、ほかの兄弟姉妹を悲しませたり、逆に失望させられたりするようなことを味わうのです。でもそんな時に、こんなこと思ったことはありませんか？神様を知らない職場の同僚や友人、近隣の人などが罪や問題を起こせば、そりゃ頭を抱えるし悲しいけど、でもそれは理解できる。彼らは救われていないのだから、聖書に逆らった行動するのはある意味当然のことだ。でも、教会や家庭でクリスチャンが問題を引き起こせば、それは理解できない。どうして聖書や神様を知っているはずなのに、そのような愛のない態度や振る舞いができるのだろうか、そのようなものを私は赦すことができない…と。こうして知らず知らずのうちに、自分自身のことを棚に上げて、兄弟姉妹に対しては、特に完璧であることを期待していたり、完璧さを期待しているために、彼らの過ちを赦すことが難しいと思ったことはないでしょうか？

覚えておかなければいけないことは、罪人である私たちはだれであれ、残念ながら、ほかの人との間に争いやすれ違いを経験するということです。あるときは罪によって、あるときは思いやりが欠けていることによって、あるときは単に意見や考え方が違うことによって問題が生じることがあります。そんなことを私たちは頻繁に経験します。だからこそ、私たちが、夫婦や家族の間であって、教会などにおいて一致を保っていこうとするなら、この頻繁に起こる問題に対して、みことばから正しく向き合うことができなければいけません。また同時に、このような問題を私たちが正しくみことばから解決できるということは、私たちが人々の前で立てるあかしにおいても、非常に重要なことになります。なぜなら、あの最後の晩餐の時にあって、イエス様が弟子たちと色々なやり取りをしていた中で、イエス様はこんなことを口にしておられました。「すべての人は、“あること”によってあなたがたがわたしの弟子であることを認めるのです。」と。このことはヨハネ13：34-35で言われていたのですが、この“あること”とは何でした？イエス様は弟子たちが福音を語ることによって、すべての人が彼らを弟子として認めると言われたのでしょうか？弟子たちが奇蹟を行うことによって、すべての人が彼らを弟子として認めるとそう言うておられたのでしょうか？そうではありませんでした。では何と言われたのでしょうか？こう言われていました。ヨハネ13：34-35で「34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 も互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。つまり、弟子たちが犠牲を払って仕え合い互いに愛し合うことによって、すべての人が彼らをイエスの弟子として認めるのだと言われたのです。そしてこれは今の私たちにも同じことが求められています。皆さんもう一度言いますが、すべての人は例外なく、人間関係における問題に直面します。しかし、もし私たちがその中であって、互いに赦し、愛し合うということを実践していくのであれば、人々の前でキリストのすばらしいあかしを立てることができるのです。そうだとすれば、私たちがこの問題に対してどのように向き合っているのかが問われています。自分がだれかに罪を犯したようなときに、逆にだれかが自分に対して罪を犯したようなときに、果たして私たちは、みことばの教えているような反応、応答をしているのでしょうか？きょうはそのことをいつものように監督の資格を学びながら考

えていきたいと思ひます。そしてぜひ自分自身の歩みとよく照らし合わせてみてください。私たちにとても関係のあることです。では、実際に内容を見ていきたいので、まずみことばをお読みします。

I テモテ 3 : 1-7

「:1 人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければはいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

## ○監督とその資格⑩：温和で 3c 節

さて、監督の15個の資格として10個目にパウロが挙げていたもの、それは「温和であること」でした。3節の三つ目に記されています。教会を監督する者は「温和であること」に関しても「非難されるところのない」人物であることが求められていたのです。

### 1. 定義

では、温和である人物とは具体的にどんな存在を指しているのでしょうか？この「温和で」と訳されていることばは、非常に意味の深いことばで、元々は「あらゆる権利や法律の文言、慣習などを強く主張しない態度」というものを表しています。そしてここから、「寛容」や「柔和」、「辛抱強さ」や「従順」といったさまざまな意味として用いられるのです。このことばに関してアレキサンダー・ストラウク先生はこのように表現しています。「温和な人とは他人が犯した過ちに報復しようとせず、自分の権利や法律を字義通りに要求しない人物である。」つまり、ポイントはこういうことです。温和な人物というのは、だれかから不当に扱われるようなときに、すぐに自身の権利を主張するのではなく、忍耐を持ってその相手を赦し、親切に接する者だということです。この人物は、ことばにおいても態度においても、すべての面において寛容で優しい人なのです。怒りに任せて、相手に反論したり、やり返そうとはしません。まさにこれは、先週考えた「暴力をふるう者」とは相反する存在だということです。先週見ましたが、暴力を振るう人というのは、自分の願いや期待に反するようなことがあったときに、そのような扱いをだれかから受けたときに怒って、その人に仕返しをする権利がある、と信じている人でした。自分はこんな扱いには値しない、相手が先に始めたことであれば自分もやり返していいだろうと言って、自分を傷つけた者に対して不満を抱いて、何らかのかたちで怒りをぶちまけても構わないと考へている人でした。でも、温和な人は、そうは考へないのです。自分の権利を主張して仕返しをすることは、だれにだってできます。それに値するようなひどい扱いを受けたかもしれません。でも温和な人というのは、それでもなお、怒るのではなく寛容さを示そう、憎しみを抱くのではなくあわれみを示そうと、相手の犯した間違いをいつまでも覚えるのではなく赦しを与えよう、何らかのやり返しを企てるのではなくて愛にあふれた優しさを自ら進んで示そうと、寛容さ、柔和さを人々に示す者、これが温和である人物の姿でした。そしてそのことを、パウロは教会を監督する者が満たしていなければいけない一つの条件として求めていたのです。

### 2・重要性

監督にとって「温和である」ということは非常に大切なことです。考へてみてください。もし監督が温和な者でなかったとしたらどうなるでしょう？例えば、教会の長老たちというのは、色々な人から相談事を受けますが、怒りや不満を持って相談にやって来た人に対して、同じように怒りでもって応答するなら、その話し合いは一体どうなるでしょう？リーダーがいつも自分の権利を主張して、人々にあわ

れみを示さないような人物であったとしたら、その教会はどうなっていくでしょう？容易に想像できませんね。間違いなく、その集まりには混乱が生じるのです。思い返してみれば、新約の時代にあっても、デオテレペスというリーダーは、まさにそのような存在でした。Ⅲヨハネ9-10にはこう書いていました。「:9 私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりたがっているデオテレペスが、私たちの言うことを聞き入れません。:10 それで、私が行ったら、彼のしている行為を取り上げるつもりです。彼は意地悪いことばで私たちをののしり、それでもあきたらずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、教会から追い出しているのです。」このような人物が教会の中にいたら、教会には困難が生じるのです。だからこそ、教会を導いていくリーダーにとって必要なのは、相手がどうであれ、赦すのに早く、忍耐を持って親切に相手に接し続けることです。これはもちろん、人のうちにある問題や罪を見逃したり、あやふやにするということではありません。親切にするというのは、そういった間違いを見逃すこと、その間違いをあやふやにするのではないのです。私たちはどんなときも真理を妥協することなく、忠実に語る必要があります。でも、それをすべて愛のうちに行うのです。教会の羊飼いである監督は、群の羊に対して、いつも温和であることが欠かせないことでした。

### 3. 適応

でも、この資格もこれまでと同じです。みことばは私たちひとりひとりも、温和であることを求めています。パウロもピリピ4:5で、ここと同じことばを用いてはっきりとこう記していました。「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。…、」

ここで皆さんに注目してほしいことが二つあります。

#### a) 「知らせなさい」(ギリシャ語:ギノスコ)

まず一つ目は、ここで使われている「知らせなさい」ということばに「ギノスコ」というギリシャ語が用いられているということです。なぜこれが注目すべきことなのかというと、それは、このことばが、単なる本で学んだ知識などを表すのではなく、「経験や関係を通して得ることのできる知識」を表しているからです。ですから、パウロがここで言わんとしたのはこういうことです。「あなたがたの寛容さを、ただことばや理論として人々に知らせるものではありません。そうではなくて、あなたがたの寛容さを、実際に人と関係を持って、その中で示していくことによって人々にそれをわからせなさい。人々にそれを体験させなさい。」問われていたのは、どれだけ知識を持っているかではなく、周りの人々が、どれだけ実際の体験として私たちが温和な人物であるかを知っているのか、ということでした。

#### b) 「すべての人」

また二つ目に言えるのは、この寛容さを示す範囲というものが、一部の人ではなく、「すべての人」であるということです。一部ではなくすべてだと書いていましたね。「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。」と。皆さん、すべての人というのは、文字通りすべての人です。つまり私たちが寛容な心を示すのは、自分に親しい家族や友人だけでなく、自分を悲しませたり、思い悩ませる者に対しても同じだということです。ここに例外は存在しないのです。何度、自分を傷つけた者であったとしても、自分に対して親切にしてくれない人であったとしても、愛することが困難に思えるような人であったとしても、私たちは変わらずに寛容な心をその人に知らせる必要があるのです。一部の人ではなくすべての人に対して、ことばだけではなく、体験として温和であることを知らせなさいと。これが私たちひとりひとりに求められていたことでした。

そうだとすれば、私たちはそのような歩みをきょうしているのでしょうか？周りの人は私たちのことを、温和な人として見るのでしょうか？それともいつも自分の権利を主張して曲げないような、愛や寛容さのない人として見るのでしょうか？また私たちの忍耐やあわれみは、すべての人に対して変わらないものでしょうか？それとも、状況や人によって変わってしまうようなものでしょうか？私たちが正直になれば、このような優しさ、赦しというものをすべての人に示すことに難しさを感じてしまうことがあり

ます。自分をひどく扱い傷つけた者に対して、そのようなことを実践するのは不可能に感じることもあるかもしれません。

でももし、そのように感じることもあるなら、私たちがすべきことは、イエス様がどれほど柔和なお方であったのかを覚えることです。言うまでもなく、この地上には、イエス様ほど心優しくへりくだった方はいませんでした。この方は神であったにもかかわらず、ご自分を無にして、人に仕える者としてこの世に来てくださいました。そして、人々の罪を赦すために、実に十字架の死にまでも従われたのです。

皆さんに少し思い出していただきたいのは、イエス様がまさに十字架に架けられた時のことです。人々から罵声を浴びせられながら、主が苦しんでいた時に、主は自分を十字架につけた者に対して、あることばを発しておられました。私たちの主は、どんなことを言われていたでしょう？そのことがルカ 23：34に記されていました。「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているか自分でわからないのです。」」と。主が口にしたのは、自分の権利を主張することでも、敵を憎んだり、呪うようなことばでもありませんでした。また自分の受けた仕打ちに対して、ふさわしい報いがその人たちに下るようにと願うことでもありませんでした。ただその者たちに対する赦しを祈っておられたのです。考えられますか？全く罪を犯していないお方が十字架につけられただけでなく、人々から辱めを受け、ばかにされていたのです。こんな扱いは自分には不当だと、容易に訴えることができました。いやむしろ、それをする権利がこの方にはあったのです。しかしそうではなく、ただ主は忍耐を持ってその苦しみを耐え忍ばれました。一体どうして主がそのように振る舞われたのか？ペテロがこのように言っていました。先週も見ましたが、1ペテロ2：24で「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」主が私たちの身代わりとして罪を負って死んでくださったからこそ、私たちは今、罪を赦され、救いをいただいて歩いていくことができます。この方によっていやされたからこそ、私たちはこの方のうちに満足をし、喜びを見出して歩むことが可能になりました。この方が忍耐を持って忍ばれたことを、私たちは信じたのです。

そうであるなら、私たちの責任はこの方の模範にならうことです。イエス様がそのような愛を示されたのなら、そのような赦しを示されたのなら、そのような寛容さ忍耐を示されたのなら、私たちも同じようにすべての人に親切にし、赦しを実践していくことです。これが10個目にパウロが挙げた監督の資格「温和で」あることでした。教会のリーダーは、自分の権利をいつも主張するような者ではなく、どんな相手であろうと忍耐を持って、親切に接する人物であることが求められていました。そしてそれは、私たちひとりひとりにも同じように問われていたことでした。

### ○監督とその資格⑩：争わず 3d節

また続けて、監督の15個の資格として11個目にパウロが挙げていたもの、それは「争わないこと」でした。教会を監督する者は、人と「争わないこと」に関しても「非難されるところのない」人物であることが求められていたのです。これも一見、先週見た「暴力を振るわない」と同じで、当たり前のように思うものです。でも、残りの時間で、この資格が一体何を意味しているのか、そして私たちひとりひとりにどう関係があるのかをよく考えてみたいと思います。

#### 1. 定義

この「争わず」と訳されていることばは、文字通り「もめごとを好まない」とか「言い争わない」という意味があります。つまり簡潔に言えば、争わない者というのは、人との争いを避け、平和を築くことを追い求める人物だということです。ある註解者もこのように記していました。「”争い好きな人”とは言葉（恐らく、身体的なものも含む）のファイターです。この人物は議論好きで、欲深く、好戦的

です。パウロが教会のリーダーに求めていたのは、あらゆる形式での脅しや争いをしない、温和な態度でした。」と。

## 2. 重要性

ですから、監督は人との争いを避けて、平和を追い求める柔和な人物であることが求められていました。そして、これも教会を導くリーダーにとっては非常に大切なことでした。なぜなら、思い返していただくと、神様は聖書の中で繰り返し、人々の間に論争や分裂を起こすような者たちは、愚か者だと教えていました。例えば箴言 18 : 6では「愚かな者のくちびるは争いを起こし、その口はむち打つ者を呼び寄せる。」と書かれているし、また同じ箴言 20 : 3では「争いを避けることは人の誉れ、愚か者はみな争いを引き起こす。」と言われていました。また同じ箴言 6 : 16 - 19には「:16 【主】の憎むものが六つある、いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。:17 高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、:18 邪悪な計画を細工する心、悪へ走るに速い足、:19 まやかしを吹聴する偽りの証人、兄弟の間に争いをひき起こす者。」と、主が憎み忌みきらわれるもののリストが七つ挙げられていますが、その中の一つとしても、「兄弟の間に争いをひき起こす者」が挙げられていました。このように私たちがみことばを見れば、みことばははっきりと、人々の間に争いや問題をひき起こす者は愚か者だと非難していたのです。神様がそのことを忌みきらわれているのです。そうだとすれば、群の模範として歩もうとしている監督にとって「争わない者」であることは、絶対に欠かすことのできない資格の一つでした。

## 3. 適応

でもこの資格もこれまでと同じように、私たちひとりひとりが追い求めていくべき基準でもありました。救われた者はみな「平和を築く者」として歩いていくことを、みことばは求めていたのです。パウロもテトスの 3 : 1 - 2で兄弟たちに対してこのように命じていました。「:1 あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。:2 また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。」またローマ 12 : 18でもこのように述べています。「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」同じことを書いていましたね。「すべての人と私たちは平和を保ちなさい」と。パウロは、一部の気の合う仲の良い人とだけ平和を築いて、自分と合わない人たちと争っていても構わないとは言わなかったのです。彼は、私たちがすべての人に対して柔和であるのと同じように、すべての人に対して平和を追い求めていきなさいと命じていました。

ただしここで押さえてほしいことは、私たちがすべての人と平和を築くことを望んだからといって、相手も自動的に同じ思いになるとは限らないということです。私たちもよく経験することの一つかもしれません。私たちにほかに人の心を変えられない以上、すべての人といつも完全に和解をしたいと望んで赦しを求めたとしても、相手は赦すことができなかつたり、また和解するのに時間がかかたりすることもあるのです。だからこそ、パウロはここで、「自分に関する限り」と言っていました。相手がどうかではなく、自分に関する限りは平和を求めなさいと。相手がどうであれ、私たちの基準というもの自体は何ら変わらないのです。私たちは自分に関する限り、自分自身にできることならすべて喜んでして、何よりも相手との間に平和を築くことを求めていきなさいと。そのような責任を私たちは負っているということです。

そうだとすれば、私たちはそのようなあかしを、きょう立てているのでしょうか？果たして周りの人たちは、私たちを、争わない人として見るのでしょうか？いやもっと言えば、平和を築く者として、私たちは人々の間で知られているのでしょうか？最初にも言いましたが、私たちの住むこの世界は罪にあふれていますし、また私たち自身も罪人であるので、互いの間で罪を犯してしまうことがあります。私たちはみなそれを経験するのです。それは家庭であろうが、教会であろうがどこでも同じです。夫婦間だろうが、親子間であろうが、教会のリーダーと会衆との間であろうが、教会員同士であろうが、性別や年齢

にもかかわらず、みなそのようなものを経験するのです。私たちは気づかないうちに人を悲しませることもありますし、自分は何の問題もないと思うようなことばでもって、人を傷つけ怒らせることもあります。ちょっとしたすれ違いによって誤解や落胆を引き起こすことがあったり、思いやりのない言動がきっかけでねたみや憎しみというものを抱くこともあります。また何度も期待を裏切られれば、失意や失望といったものを覚えます。そして私たちは悲しいことに、日々の生活の中でそのようなものに直面します。見渡してみれば、私たちはそのような罪を目の当たりにすることも、人々が争っている場面に直面することもあるのです。周りにはそのようなものがよくあるのです。

でも皆さん、周りで起こっていることではなくて、だれかがあなたに対して罪を犯した場合、普段どのようにそれに応答しているのでしょうか？ どうしてこの人は聖書や神様を知っているはずなのに、これほどまでに愛のない行為を取れるのだろうか？ とつぶやいて、不満や怒りなどが心を支配していないのでしょうか？ 自分を傷つけた人に対して、何としてでもその人には仕返しをしなければと求めたり、自分の権利を主張してすぐに言い争おうとしないのでしょうか？ それとも、その人たちに対して自ら進んで愛を示そうとするのでしょうか？ また、私たちは、だれかの過ちや失敗によって苦しめられたりすることがありますが、そういったものを経験したときに、あなたはその過ちをいつまでも心の中に記録して事あるごとにそれを持ち出して、その人を責めたり、責任を取らせようとするのでしょうか？ これは実際のことばや行動だけではありません。心の中で思い描いている苦い思いも同じことです。その人を赦せないという思いから、関係を断ったり、距離を置いたりしないのでしょうか？ それともそうではなく、その人を心から愛して、心から赦して、その人との間に平和を築くことを熱心に求めているのでしょうか？

皆さん、相手との間に平和を保っていくことは確かに簡単なことではありません。それに大きな犠牲が伴うということも私たちはよく知っています。でも何よりも、こういった問題や争いというものがだれかとの間にあり続けられれば、私たちの心から、喜びや平安が次第に奪われていくということを私たちはよく知っているのです。人に対する悪い思いで心が支配されてしまうことがあるということです。だからこそ、私たちが特に夫婦や家族間であって、また教会の中であって一致を保っていこうとするなら、こういった問題に対してみことばから正しく向き合うことができなければいけません。そうしなければ、私たちはいつまでもその問題にとらわれてしまうのです。では一体どうすればこの点において成長することができるのでしょうか？ どうすれば「平和を築く者」として歩むことができるのでしょうか？ もちろん色々なことが言えます。

でも最後に一つ、平和を築く者として成長するために大事なことを考えてみましょう。

大切なことの一つは、「自ら進んで和解を追い求める」ということです。私たちが平和を築いていく上で大切なことは、自ら進んで和解を追い求めるということです。聖書ははっきりと兄弟との間に罪の問題が起こった場合に、私たちがどのように行動するべきなのかを教えてくださいました。皆さんご自分の聖書でマタイの18：15を開いてみてください。イエス様はこのように言われていました。「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行ってふたりだけのところで責めなさい。もし、聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。」よく考えてみてください。イエス様はここで、兄弟間で起きた罪に対して触れておられるのですが、兄弟が罪を犯したときに、一体だれが、その兄弟の罪を責める責任を負っている、と言われていたのでしょうか？ それは、“あなた”でした。もし兄弟姉妹があなたに対して罪を犯したのなら、あなたがその人のところに行って、二人だけのところで、その罪を知らせる必要があったのです。言い換えれば、罪を示して和解を求める責任は、あなた自身にある、ということです。これを聞いてこう思う方がいるかもしれません。何を言っているのですか、私は何もしていないじゃないですか。相手が先に私に対して罪を犯したのであれば、相手が私のところにやってくるのが当然でしょ。どうして、私が行かないといけないのですか…。

皆さん覚えておかなければいけないこと、それは、ここで使われている「行って」また「責めなさい」というこの二つの動詞は、どちらも“命令形”だということです。つまり罪を犯した兄弟のところに行って、その問題を取り扱う責任があるのは、私たちの選択ではなくて、神様からの命令だ、ということです。私たちはそれをする責任があるのです。そしてもっと言えば、これこそが、神様が私たちに対して成してくださったことでもありました。

神様は、私たちが自分自身を罪人だと認めて、神様どうか私を助けてください、と願ったから救い主を送ってくださったのではありませんでした。そうではなく、私たちがまだ罪人であったときに、神様の敵として歩んでいたときに、キリストが私たちのために死んでくださったのです。私たちではなく、主が犠牲を払って、まず、和解を求めてくださいました。主がこのようにされたことと同じことを、神様は私たちに求めているのです。もし、皆さんの夫や妻や、兄弟姉妹があなたに対して罪を犯したなら、ほかのだれでもないあなたが、その人のところに行って罪を責め、そして和解を求めなさい。それがまず一つ教えられていたことでした。でも聖書は、罪の問題をどう扱うかに関して、これだけ教えていたのでもありませんでした。

今度は同じマタイの5：23－24を見てください。そこではイエス様がこのように語られていました。「：23 だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、：24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」ここでも皆さんよく考えてみてください。今度は逆に兄弟に対して自分が罪を犯したような場合、そのことで恨まれていることを思い出したのならば、一体、だれがその兄弟のところに行って仲直りをする責任を負っている、と言われていたのでしょうか？だれです？それは、“あなた”でした。つまりイエス様は、兄弟姉妹が私たちに罪を犯した場合だけではなく、私たちがだれかに対して罪を犯した場合も、和解を求める責任は、私たち自身にある、とそう言っておられたのです。そして、これは非常に大切なことでした。イエス様はこう言われていましたね。「祭壇の上に供え物をささげようとしているときに、もし兄弟に恨まれていることを思い出したなら、供え物は置いたまま出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それからその供え物をささげなさい。」と。

このことばの意味を正しく理解するためには、この当時の歴史的背景をよく覚える必要があります。少し想像してみてください。イエス様がこのメッセージを群衆に語っていた時、彼らはガリラヤにいました。ここは、当時の人々が供え物をささげるために集ったエルサレムの町から約80キロ離れた場所にあったのです。当然この時代にあつて、今の私たちが持っているような車や電車はなかったわけで、人々はその距離を一週間ほどかけて歩いて移動したのです。供え物をささげに行くのに、人々は一週間かけてそこに行こうとしていました。彼らにとってささげ物をささげるということは、時間だけでなくさまざまな労力や犠牲を伴うものであったのです。そのことをわかっていたイエス様が仰るのです。

「あなたがたがやっとのことで祭壇のところにとどり着いてささげ物をささげようとしたまさにその時に、もし兄弟姉妹があなたのことを恨んでいることに気づいたのなら、ささげ物をそのままにして、まず、その人のところに行って和解しなさい。」と。皆さんだったらどう思います？主よ、正気ですか？私は一週間かけてやっどこまでやって来たのです、これからまた一週間かけて兄弟のところに行って、それからまた帰って来て、ささげるのですか？先にこれを済ませてから行かせてください、とそう思うかもしれません。でもそんなことを考えるなら、神様は何と言われると思いますか？「まず、行きなさい。礼拝をささげることよりも、まず行きなさい。あなたが罪を犯したその兄弟と、まず和解しなさい。」つまりここでのポイントはこういうことです。たとえ私たちが神様の前に礼拝をささげていたとしても、涙ながらに賛美をしていたとしても、もし、私たちのうちに、ほかの兄弟姉妹に対して頑なに赦せない思いを持ち続けているのなら、その礼拝は無意味だということです。皆さんがどう感じるか



ではありません。みことばがそう言っているのです。神様は、私たちが罪の問題を解決しないままで、何事もないかのように礼拝することを、“よし”とは決してされていないということです。ですから、もし今皆さんの中に、まさにだれかに対して苦い思いをいつも抱いて、主に喜ばれる関係にないということを知っているながらも、そのまま放置されている方がおられるのであれば、よくきょうのみことばに耳を傾けてください。はっきりと言われていました。「まず行きなさい。礼拝をささげる前に、まずその兄弟姉妹ところに行きなさい。そして和解をしてから、礼拝をささげるように。」と。

皆さん、私たちは自分に関する限り、すべての人と平和を保つ責任を負っていました。問われているのは、相手がどうであれ、まずは自分自身の罪と正しく向き合うということです。これは、「ごめんなさい。でも、あなたがあんなことをしたのがもともとの原因なのです。だから、あなたも私に謝罪してください。」とは言わないということです。まず、あなた自身の罪を正しく取り扱い、そしてあなたが罪を犯した者のところに行って心から悔い改めて、赦しを求め、和解を追い求めることを私たちに求められているのです。確かに、ある人はその和解をすぐに受け入れてくれないこともあります。神様を知らない未信者とは特にそうでしょう。でも、それはその人と神様との問題です。私たちに問われていることというのは、私たちが自分に関する限りすべてのことをして、その人と平和を求めよう、その人と平和を築こうとするかということです。私たちはその人の心に神様が働いてくださることを祈りながら、自分に与えられた責任をへりくだって全うしていくことです。そしてこれが11個目にパウロが挙げていた監督の資格「争わないこと」でした。

## 〇まとめ

さて、きょう私たちは監督の資格の10個目と11個目についてともに考えてきました。改めてどうだったでしょう。監督は自分の権利をいつも主張するような者ではなく、どのような相手であろうと、忍耐を持って親切に接する「温和な者」であることが求められていました。監督は人との争いを避け、平和を築くことを熱心に追い求める、「争わない者」であることも求めていました。これらの姿こそ、教会を導く霊的リーダーが満たしていなければならないそのような資格だったのです。でも同時に、これらはただリーダーにだけ与えられたものではなく、私たちひとりひとりが目指していく目標でもありました。私たちはみな、すべての人に寛容な心を示す平和を保つ者として歩んでいくことが求められていたのです。自分にとってそれはとても難しく到底できるようには思えない、と言われるかもしれません。その通りです。私たちの知恵や力でもってこれらの基準を満たすことなんて、だれにもできません。でも、感謝することがあります。それは、このような親切や柔和というものは、私たちが御霊に満たされて歩むときに、神様が私たちのうちに働いて生み出してくれるものだということです。なぜなら、パウロは御霊の実について、ガラテヤ5：22-23で触れていました。「:22 御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、:23 柔和、自制です。」このような御霊の実が私たちのうちに与えられているのです。だからこそ、私たちは希望を持ち続けることができます。私たちはいろんな失敗をします。でも、私たちが神様のみことばを学び、聖霊に頼って歩み続けていくのであれば、このような者として成長していくことができるのだと。確かに足りない部分や成長しないといけない部分がたくさんあります。失敗した人との間に争いや問題が起こることはこれからも経験するでしょう。でも私たちに助け手となる御霊や、私たちを導いてくれる知恵のあるみことばがここに与えられているのです。そうであるなら、神様に助けを求めながら、罪を犯せばそこで悔い改めて、そして互いに愛を実践する者として歩んでいくことです。どのようにして私たちがイエス様の弟子であることを知るのでしょくか？互いに愛し合うことです。私たちを救ってくださったこの主をあかしする者として、そのことを覚えて、今週もともに歩み続けていきましょう。